

茶葉抽出色素による和紙布の染色

○木村光雄*¹ 良辺文久*² 池側康彦*² 道明美保子*³(*¹神戸女大・院 *²伊藤園中研 *³滋賀県立大)

【目的】我々が日頃愛飲しているお茶はツバキ目ツバキ科の植物であって、葉にはタンニンの他にクロロフィルやフラボノイド類などの色素を含有している。従って、これらと媒染をうまく利用すれば一つの染料植物での多色染めが可能である。また、最近開発された和紙布は往時の紙布とは異なって、自動織機によって製織されたものであり各種の織物が作られているが、その染色性などの詳細については不明である。本報においては茶葉からの色素抽出条件と媒染による染色結果と和紙布の染色性を木綿及び絹と比較検討した。

【方法】供試布として、和紙を3mm幅に細断し、撚糸して製織した平織和紙布、木綿平織布及び絹平織布をいずれも無処理または Al^{3+} 先媒染、カチオン化処理（カチオン界面活性剤+アルカリによる前処理）して使用した。茶葉は市販の粉茶を使用し、熱煎抽出して第1の染浴とした。さらに、煎出した後の茶葉残滓を硫酸銅水溶液と水酸化ナトリウム水溶液によって処理し、弱アルカリ水溶液で抽出して第2の染浴とした。いずれも浸染した後、無処理布は Al^{3+} 、 Cu^{2+} または Fe^{3+} によって後媒染した。

【結果】まず、第1の染浴（タンニン及びその他の色素類を含む）中で無処理及び Al^{3+} 先媒染布を浸染し、無処理布は後媒染を行なった結果、黄、茶及び黒色を得た。次に、第2の染浴（茶葉中のマグネシウムクロロフィルが銅クロロフィリンNaに変換されて含まれている）中で無処理及びカチオン化処理布を浸染し、 Cu^{2+} 後媒染によって無処理布では淡緑色を、カチオン化処理布では濃黄緑色を得た。また、和紙布は材質的にはラミーと同じであるが、いずれの場合についても木綿や絹より良好な染着結果が得られた。